

記載すれど、附會の妄誕取るに足らず。又明智軍記に、天正五年四月廿二日、柴田勝家の諸勢尾山城を攻落し、坪坂伯耆・同新五郎・赤塚甚右衛門以下、大將分の首十九安土へ到來する由見れたれど、信長記等に載せたる首注文に、赤塚甚右衛門の名見えず。殊に尾山落城を天正五年とするも誤也。

○甚右衛門坂故蹟

平野甚右衛門討死の遺蹟とて、甚右衛門坂の下より八分目程登る路傍に、古木の櫻ありしかど、中古枯木と成り、其の根株のみ残り。天保の頃までも、此の根株路傍にありしかど、其の後取除き、今は其の故蹟絶えて知るものなきやうに成りたり。是いにしへ甚右衛門の討死せし驗なりと云ひ傳へたりと、金子意永いへり。

○平野甚右衛門傳

拾纂名言記に云ふ。利常卿松坂檢校へ尾山城の故事を尋ね給ふ時、甚右が坂は如何なる事ぞと御尋ねあるに、是は本源寺に後は近郷の者付隨ひ、自然と一揆大將の如く成る也。然る處に越中の一揆共發向して、尾山城を切取り、金

澤廻りを隨へんとし、不意に寄せ来る。其頃美濃の浪人に平野甚右衛門といふ者、知る筋目有りて本源寺に養はれ居たるにより、少しもさはがず、城を能く守りて破られず。本源寺は其日湯浦口へ鷹野に出有之。一左右を聞いて走歸り、恙なく入城す。甚右衛門出迎へて、先づ恙なく御入り大慶す。去れ共御氣色は悪しくも無之哉、御色あし、と云ふ。此言葉を氣に掛けたるか、本源寺忿て曰く、汝臆病者なるがゆゑ、眼が味み見損ずると覺ゆ。我少しも臆せずと答ふ。甚右衛門聞きて儲々存知もよらぬ仰哉。我が臆病いつ御覽あるや。かほどつれなき人とは不知、今迄養はれ申す恩には、打果す事堪忍仕也。臆病者が手なみ御覽あれとて、鑓をおつ取り、彼坂口へ出で、充滿仕たる敵の中へ、木戸を開かせ突き掛りて、一まくり追下す。又もり返し来る敵を追ひ下す處に、坂中にて矢に中り終に討死す。敵も味方も目を驚かし惜しみけり。是より此坂をば甚右が坂と申し傳へたりと承ると申上ぐ。とあり。按ずるに、右は當國にての古傳説にて、松梅語園に載せたるも全く同じ。但し其の戦死せし年曆は詳かならず。三州志健囊餘考に、天

正八年閏三月、柴田勝家加州一揆征伐出勢、佐久間玄蕃尾山城を攻め、守將松永丹波を首め鈴木出羽・其子右京・次郎左衛門・采女太郎、暨び黒瀬左京、平野甚左衛門等、防撃奮闘すれども守るに堪へず戦死す。依りて本源寺等城を支蕃に與へて去る。と載せたり。自註に云ふ。平野甚右衛門は美濃浪士也。此の頃尾山城に寄寓、時に攻衆猛進す。平野屢之を撃ち却け、其の後坂中にて闘死す。其の死地を甚右衛門坂と云ふ。今猶遺名存す。平野の子を齋宮と云ふ。齋宮は不破彦三に仕へ、不破齋宮と改姓す。其の子不破大學瑞龍公に仕ふ。此の末孫權左衛門に至つて明和元年家絶す。按ずるに、不破平野並に美濃の産也。故に平野半落して不破に歸する歟。又按ずるに、天正四年石川郡鷹巢堡主に平野神右衛門と云ふあり。疑はらくは是と同人歟と。平次按ずるに、天正八年尾山落城の時、平野甚右衛門を討ち取りたる事、其の據を知らず。恐らくは富田景周の臆説ならん。信長記・太田和泉守日記等に載せたる首注文の中にも、平野甚右衛門の名を記載せず。是其の證也。又關屋政春の古兵談に云ふ。加州森本の龜田大隅と佐久間玄蕃と和

談破れ、玄蕃大勢を以て俄攻めにしたる時、玄蕃先手平野甚右衛門切岸に付きけるに、玄蕃采幣を取つて、旗本より一旦に操落す。甚右衛門云ふ。一揆などの籠城をか様にはせぬ物なり。うつけたる主を持ちて是非に及ばずと云ひて、塀を乗越え、内にて討死すと、加州地方老人物語なりと。又有澤永貞の古兵談殘囊集には、平野甚右衛門は信長公の麾下なり。本能寺の事を聞きて、上方へ登らんと松任まで行きけるに、跡にて一揆起ると云ふに依りて、逃げ登りしといはれては如何なり。佐久間玄蕃をも一揆ども攻めても如何也とて取つて返すに、伏兵小坂に在りて、甚右衛門を遣り過し、伏起り、終に甚右衛門討死す。此人の居りたる廊の坂をば、今以て甚右衛門坂と云ふ。金澤城權現堂より下る坂なり。といへり。平次按ずるに、信長公本能寺の事と云ふは天正十年六月也。信長公の麾下なる平野甚右衛門は別人なるべし。信長記に、尾張の士に平野甚右衛門と云ふあり。是と同人なるを、尾山城に賊魁に隨心して居たる美濃浪士の平野甚右衛門と同名なるにより、混同なしたる説なる事いちじるし。又寛永八年五月、山崎長門家